

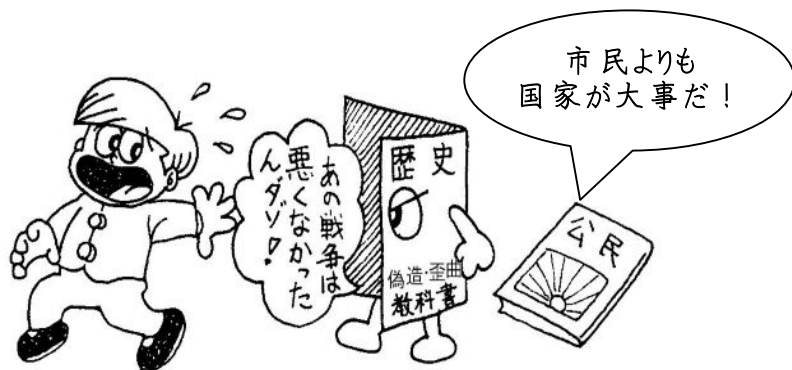
何が問題？

扶桑社版（「つくる会」）教科書

今治市教育委員会は、来年2010年の4月から市内の各中学校で使う歴史及び公民の教科書に、扶桑社版を採択しました。

これは、学校の先生（校長・教頭先生）や保護者らで構成している採択協議会の推せんや、社会科担当教師へのアンケート結果を、全く無視・黙殺して決めたものでした。いわば、たった数名の委員が、約3000人もの生徒達（新1・3年生）に、自らの価値観に合う教科書を、独裁的・強権的に押しつけたことを意味します。

教育委員らが、そこまでして子ども達に使わせようとする教科書とは、いったいどのような内容のものでしょうか？



扶桑社版教科書は、教科書会社がつくったものではありません。右翼・国家主義団体がつくったものです。

この扶桑社版の両教科書は、いわゆる教科書会社がつくったものではありません。中学校の歴史教科書から、軍隊慰安婦等の、日本による加害の事実を削除させる活動をしていたり、憲法の改悪をめざしていたりしていた、いわゆる右翼的・国家主義的な人々が集まってつくった「新しい歴史教科書をつくる会」の手によるものです。

つまり、上記のような自分たちの考えを、まだ頭のやわらかい生徒たちに詰め込むことを目的としてつくったものなのです。そのため、歴史教科書の代表執筆者も、この会の幹部ではあっても、歴史学の専門家ではありません。私たちは、まず、この重大な事実を押さえておきたいと思います。



【 扶桑社版 公民教科書 】

基調・・・市民より国家、民主主義よりも国家主義、基本的人権よりも国家の秩序を重んじる考えが貫かれています。

〔重大な問題点〕

※以下、□の中の文章は、教科書から引用・抜粋したものです。

① 基本的人権の軽視

扶桑社版	東京書籍版
<ul style="list-style-type: none"> ▪ 基本的人権は、個人の主張や要求を無制限に認めているものではない。 ▪ 基本的人権の保障は重要な政治目的のひとつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 日本国憲法は、基本的人権を、おかすことのできない永久の権利として保障している。 ▪ 人権の保障は、国家に対して、個人を尊重して自由な活動や幸福で平和な生活を実現することを要求している。 ▪ 国家は個人の自由を侵害してはならない。

② 国民主権よりも国家主権が大事！

扶桑社版	東京書籍版
<ul style="list-style-type: none">主権とは外国からの干渉を受けず、その国のあり方を最終的に決定する力のことであり、その中には憲法自体を改正する権限も含まれている。	<ul style="list-style-type: none">国民主権は、国の政治の決定権は国民がもっており、政治は国民によって行われるという原理です。それは、民主政治とほぼ同じ意味です。

③ 憲法や法律は国家のためのもの！

扶桑社版	東京書籍版
<ul style="list-style-type: none">法律とは国家が強制的に国民に守らせるルールである。法には、他の法の基本となる憲法を頂点として、さまざまなものがある。	<ul style="list-style-type: none">憲法が大切なのは、とりわけ国家の権力を統制して、わたしたちの人権を守っているからです。憲法は国の最高法規であって、憲法に違反する法律や命令などはすべて無効です。

④ 日本国憲法よりも大日本帝国憲法を評価

大日本帝国憲法が、天皇主権の国家体制をつくり、国民の自由を奪い、人権を抑圧した非民主的な憲法であったことには一切触れないばかりか、「国民にたたえられた大日本帝国憲法」というタイトルの文章まで載せています。

一方、日本国憲法については、占領軍に押しつけられた憲法だという主張に重点を置き、その原理や積極的意義についてはほとんど述べていません。

⑤ 「憲法改悪」のススメ

基本的人権についての説明よりも先に、「憲法改正」と掲げた2ページにわたる項目を設けています。そして、制定以後一度も改正されていないことの特異性を強調するなど、「改正」の方へと生徒の気持ちが動いていくようなつくりかたになっています。もちろん、他社の教科書には、このような項目はありません。

⑥ 差別問題の軽視・肯定

さまざまな差別の問題については、ほんのわずかしか触れていません。しかも、差別の克服へと向けた書き方ではなく、それを肯定するような記述さえ混ざっています。

一方、他のどの教科書も、差別の問題、平等・共生の問題に多くのページを使っています。しかもそこでは、資料や写真・カットなどを使って、差別の実態がわかりやすく伝わるようになっているとともに、差別をなくしていかなければいけないということが、はっきりと書かれています。

⑦ 「国旗・国歌の尊重」の強要

国旗・国歌に関する記述に3ページもさき、生徒たちに、それらを尊重し、愛国心をもたなければならないことを説く内容となっています。このような無条件な「愛国心」づくりは、戦争など、国家が間違ったことを行っている、「お国のため」として、それに忠実に従う「国民」をつくることへとつながっています。もちろん、他社の教科書に、このような内容の記述はありません。

⑧ 自衛隊の海外派兵を肯定・賛美

憲法の平和主義についての説明の項目の最初の見出しは「自衛隊の誕生」となっています。そして、そこでは、自衛隊による海外での活動―海外派兵を評価し、さらに自衛隊が海外で「自由に」動くことができる体制になることを望む方へと、読み手が促されていくような書き方になっています。

⑨ 男女の差別的役割分担に固執

両性の平等・男女共同参画社会・女性差別の根本的な解決への動き等に批判的な立場で記述しています。

これは、他社の全ての教科書と正反対です。

⑩ 自国中心・偏狭なナショナリズム

他国との共生・平和の方向ではなく、自国中心の一方的な主張を、断定的に展開しています(領土問題など)。

※ 引用の東京書籍版は2002年度～2005年度まで、今治・上島地区で使われていたもの、扶桑社版は現行のもので、来年2010年度から同地区で使用予定のものです。

【 扶桑社版 歴史教科書 】

基調・・・近・現代の日本が他国の人々に行った加害行為を隠ぺい・正当化する歴史歪曲教科書です。また、古代から現代まで、根拠のない日本賛美で貫かれ、他国を顧みない、極端に自国中心的(ジコチュー)な教科書です。

〔重大な問題点〕

① 過剰なまでの日本賛美と、アジアの国々への優越感・蔑視

古代から現代まで、「日本は世界一」的な過剰な日本賛美が随所に出てきます。

▲「これほど強い感情を表現した像は、世界にも類をみない。」(グラビア2p。法隆寺五重塔塑像群の一体)

▲「東アジアで、中国の王朝が定めたものとは異なる、独自の年号を定めて使用し続けた国は日本だけだった。」(39p)

▲「日本の連合艦隊は、東郷平八郎司令長官の指揮のもと、兵員の高い士気とたくみな戦術でバルチック艦隊を全滅させ、世界の海戦史に残る驚異的な勝利を収めた。」(167p)「世界の海戦史上、これほど完全な勝利を収めた例はなかった。」(169p)

▲「世界の奇跡・高度経済成長」(220p)

一方、隣国の朝鮮や中国に関しては、

▲「新羅(しらぎ)が、独自の律令を持たなかったのに対し、日本は、中国に学びながらも、独自の律令をつくる姿勢をつらぬいた。」(42p)

▲「中国は、欧米列強の武力による脅威をじゅうぶん認識することができなかった。〔略〕朝鮮も同じだった。」「(中国は)西洋文明を取り入れる動きは実を結ばなかった。〔略〕それに対し、日本は〔略〕列強の軍事的脅威に敏感に反応した。〔略〕欧米と日本の力の差を痛切に認識



し、西洋文明を積極的に学ぶ方向に政策を転換した。」(148p)

単に、日本の歴史的事実について述べれば足りるところを、わざわざ「朝鮮や中国は～だったが、それに対し、日本は～だった」という書き方をして、朝鮮や中国と比較する形で日本の優越性を述べ、日本の歴史を賛美しています。

② 近代日本の、アジアの国々に対する侵略・植民地支配を、 事実を歪曲偽造することによって、正当化しています。

<1> 朝鮮への侵略と植民地支配について

近代日本国家は、その成立後間もないうちから、朝鮮への侵略をすすめました(江華島・永宗島への攻撃と略奪〔1875〕不平等条約の強要〔1876〕)。

そして、その後の日清戦争も日露戦争も、日本が朝鮮を単独支配するために行ったものでした。日清戦争においては、「清国軍と平壤あたりで一戦をまじえ、勝利を得たのち和を講じ、朝鮮を日本の支配下におく」(林董外務次官〔当時〕著『回顧録』)という目的があったし、日露戦争においては、「韓国に対し政治上および軍事上において保護の実権を収め、経済上においてますます我が利権の発展を図るべし」との閣議決定(1904年5月31日)を行っています。

そして日露戦争に勝った後、実際にそのことを実行して朝鮮を日本の保護国とし(1905)、1910年には完全に植民地にしました。

しかし、扶桑社版教科書は、これら明白な日本の侵略・植民地化の事実に対し一貫して、それらは「日本の安全と防衛のために行ったもの」とする虚偽の記述をして、正当化しています。

<2> 中国への侵略

中国への侵略に関する記述は、まず初めに「中国の排日運動」という項目を据え、

▲「勢力を拡大してくる日本に対しても、日本商品をボイコットし、日本人を襲撃する排日運動が活発になった。」(194p)

と、1920年代の状況について書きます。

一方、日本の方は、

▲「幣原喜重郎は〔略〕中国の関税自主権の要求を支持するなど、中国の民族感情に同情をもって対応する協調外交を推進した。」(194p)
〈注〉

とし、

▲「しかし、中国の排日運動はおさまらなかった。」(194p)

と書きます。

そして、1930年代の、日本による「満州事変」から、その後の「日中戦争」の記述へと進んでいきます。(現在、今治・上島地区で使われている東京書籍版は、1930年代のこの時期全体を「日本の中国侵略」というタイトルの下で記述していますが、扶桑社版はそうにしていません。)

つまり、中国での「排日運動」は、まず初めに、日本の侵略と、さまざまな利権の中国からの奪取等があつて、それらに対して起こったものであるにもかかわらず(他の教科書は、このことがわかるように書いています)、扶桑社版は、まず最初に「中国の排日運動」があつて、だから日本の中国に対する「戦争」が拡大していったと読めるようにしています。

日本が主体的・積極的に始め、持続・拡大した中国への侵略であるにもかかわらず、このような巧妙な方法で歴史的過程・事実を歪曲し、正当化しているのです。

〈注〉幣原(しではら)は、よりソフトに、中国における日本の権益を追求しようとしたが、権益がおかされそうになると、直接軍事力を行使した。「関税自主権回復」にも、最終的には反対して、中国に不平等条約の存続を強要した。

③ 日本の加害行為は極力うすめ、あいまいにする一方で、 事実を歪曲して、巧妙な日本賛美を行います。

<1> 南京大虐殺について

扶桑社版は、南京大虐殺や朝鮮人・中国人強制連行など、日本の行った加害行為を極力うすめ、あいまいな形で記述しています。たとえば、南京大虐殺に関して、東京書籍版は、本文中で、

▲「日本軍は、同年末に首都南京を占領しました。その過程で、女性や子どもをふくむ中国人を大量に殺害しました。(南京事件)」(188p)とし、脚注でも、

▲「この事件は、南京大虐殺として国際的に非難されましたが、国民には知らされませんでした。」(188p)

と書いているのに対し、扶桑社版は、本文中では全く触れず、脚注のところでも、

▲「このとき、日本軍によって、中国の軍民に多数の死傷者がでた(南京事件)。なお、この事件の犠牲者数などの実態については資料の上で疑問点も出され、さまざまな見解があり、今日でも論争が続いている。」(199p)

として、本当に事実かどうかわからないと思わせる書き方をしています。

<2> 「満州国」の実態について

また、中国人の農地を奪ったり、多くの中国人に強制労働をさせたりし、抵抗する人々に対しては容赦なく弾圧・殺害していった、日本による過酷な「満州国」支配の実態については全く触れない一方で、

▲「満州国は、五族協和、王道楽土建設のスローガンのもと、日本の重工業の進出などにより経済成長をとげ、中国人などの著しい人口の流入もあった。」(197p)

などと賛美しています。

「満州」を支配する日本国家・日本企業が、中国の利権を奪い、中国人を酷使することによって利益をあげた「経済成長」を、いかにも、中国の人々にとってそうであったかのように読める、巧妙な書き方をしているのです。

④ 日本の加害行為は最小限の記述にとどめ、
他国の加害行為については、その非道ぶりを強調し、断罪します。

『20世紀の戦争と全体主義の犠牲者』という、まるまる1ページを使ったコラムにおいて、日本の加害行為については、▲「戦争で、非武装の人々に対する殺害や虐待をいっさいおこななかった国はなかった。」という前提をつけたうえで、たった2行余りの記述ですます一方で、ソ連やドイツの加害行為に関しては、日本の何倍もの分量と強い言い方で、その非道ぶりを書き添えて、断罪しています。

そして、

▲「二つの世界大戦は各国に大きな被害をもたらしたが、その一方で、ファシズムと共産主義が、戦争とは異なる国家の犯罪として、膨大な数の犠牲者を出したことも忘れてはならない。」

と結んでいます。

当時、日本も、この「ファシズム」と呼ばれる国家体制をとっており(天皇制ファシズム)、かつ、さまざまな国家犯罪を行ったにもかかわらず、日本は全く関係がないかのような書き方になっているのです。

まさに「自己の非は認めず、他人の非はあげつらう」という記述になっています。

⑤ 日本の行なった戦争を賛美する表現の数々

<1> 日清戦争

▲「日本は陸戦でも海戦でも清を圧倒し、勝利した。日本の勝因としては、新兵器の装備に加え、軍隊の訓練・規律にまさっていたことがあげられるが、その背景には、日本人全体の意識が、国民として一つにまとまっていたことがある。」(164～165p)

<2> 日露戦争

「問題点①」のところであげたもの以外をピックアップします。

▲「日本艦隊は、午後2時5分、8000mまで近づいたところで敵艦対の眼前で左に大転回し、敵の進路に立ちふさがった。日本艦隊は、ロシアの司令長官が乗る旗艦スワロフをはじめ、先頭に行く戦艦に集中砲火を加えた。勝負は40分で決まった。旗艦スワロフは多数の命中弾を受け、大火災をおこした。続いて、4隻の戦艦が撃沈された。ロシアの司令長官は負傷し、のち降伏したのである。」(169p)

▲「夕刻から翌日にかけて、日本は追撃戦に入り、2日間で完璧な勝利を得た。38隻のロシア艦隊うち、撃沈21隻、捕獲6隻、逃亡後抑留されたもの6隻、なんとかロシアのウラジオストク港に逃げこんだ船は3隻だけだった。いっぽう、日本側は水雷艇3隻が沈んだだけだった。世界の海戦史上、これほど完全な勝利を収めた例はなかった。」(169p)

<3> アジア太平洋戦争

▲「日本海軍はアメリカのハワイにある真珠湾基地を空襲し、アメリカ太平洋艦隊に全滅に近い打撃をあたえた。」(204p)

▲「日本陸軍はマレー半島に上陸し、イギリス軍を撃破しつつシンガポールをめざして進んだ。」(204p)

▲「日本の緒戦の勝利はめざましかった。マレー半島に上陸した日本軍は、わずか70日で半島南端のシンガポールにある英軍の要塞を陥落させた。」(204～205p)

▲「日本軍はとぼしい武器・弾薬で苦しい戦いを強いられたが、日本の将兵は敢闘精神を発揮してよく戦った。」(205p)

▲「このような困難の中、多くの国民はよく働き、よく戦った。それは戦争の勝利を願っての行動であった。」(209p)

まるで戦意高揚をはかるための、戦時政府の宣伝文書のようなものである。もちろん、このような類の文章・表現は、他社の教科書には一切ない。たとえば東京書籍版の、アジア太平洋戦争に関するところでも、戦闘に関わる部分は、

▲「1941年12月8日、日本はハワイの真珠湾を奇襲し、太平洋戦争が始まりました。」(192p)

とあるだけである。

⑥ 庶民・民衆ではなく、
統治者の立場・視点からの歴史記述になっています。

扶桑社版教科書をつくった人々や、その採択を推進している人たちは、よく「日本の伝統と文化の尊重」ということを言いますが、この教科書には、日本の民衆——つまり、この日本列島を舞台に生きてきた人々の「伝統」や「文化」、生活の歴史については、他社が記述しているにもかかわらず、ほとんど書いていません。

また、その時代時代の男の支配者・為政者に関する記述はひんばんに登場しても、女性はほとんど出てきません。

まさに、支配者・統治者の立場・視点からの歴史叙述となっています。

⑦ 基礎的な事実の間違いが多くあります。

たとえば、その一部をあげれば、

▲「現世人類の脳の容量は2000cc程度」(16p)→ 1500ccの誤り

▲「おもな戦国大名」として小早川氏を記載(87p)→ 小早川氏が大名となるのは、毛利氏が豊臣氏に服属した後であるので、いわゆる「戦国大名」ではない。

▲「農民は土地の所有権を認められた。」(96p 太閤検地)→ 直接耕作者として認められたのであって、所有権はなかった。

等々。





事実を書いた教科書によってこそ 歴史の勉強ができる

扶桑社版を採択し、子どもたちに使わせようとする人々は、日本の行った加害行為の〈事実〉を記した、扶桑社版（・自由社版）以外の教科書を、自虐的であると言って非難します。

そして、それらを極力書かず、〈事実〉を歪曲してまで日本を賛美する扶桑社版を、「日本の歴史に誇りと愛情を持てる教科書」だと言います。

しかし、〈事実〉ではないことによって、日本の歴史に誇りを持たせられようとするのを、はたして、子ども達は望んでいるでしょうか？

自らに都合の悪いことを、極力書かない教科書は、「誇り」とは正反対の〈卑怯な教科書〉ではないでしょうか？

事実ではないことを基にして、日本の歴史に愛情を持てるように仕向けるならば、それは、日本の侵略戦争を支えた、あの皇国史観教育と本質的に変わるものではありません。

問題は、「自虐」か「誇り」かなどということではありません。

肝腎なのは、生徒たちが、歴史を学ぶ、歴史に学ぶ教科書として、〈事実を事実として書いている教科書〉と、〈事実を歪曲し、隠ぺいしている教科書〉の、どちらがふさわしいのか、ということなのです。

そうであれば、もう、答えは自明のことであると思います。



発行 2009.9.26